

研究公開文書

5
2028年 7月 5日

研 究 名	急性期脳卒中患者の運動量が合併症や骨格筋量に与える影響
研 究 の 概 要	<p>急性期脳卒中患者では、筋萎縮や感染症などの合併リスクが高いことが課題となっている。歩行が自立しない患者は入院2週間後の筋断面積が入院時の80~90%まで低下すると報告されており、また急性期脳卒中患者30~60%が肺炎や尿路感染症などを合併しているとされている。</p> <p>近年、脳卒中患者の運動量が注目されている。急性期脳卒中患者は入院後、身体不活動の状態に陥りやすく、日中の53.2%の時間が身体不活動の状態、88.5%の時間をベッドまたはベッドサイドで過ごしているとされている。</p> <p>亜急性期脳卒中患者においては身体活動量と大腿四頭筋の筋厚に有意な正の相関があると報告されており、運動量と合併症の発生には一定の見解が得られていない。</p> <p>そこで本研究の目的は急性期脳卒中患者における運動量が下肢の筋萎縮や合併症の発生率に与える影響について明らかにすることである。筋萎縮や合併症の発生率と運動量の関係が明らかになることで、運動量の目安を患者や医療者間で共有することにつながる可能性がある。</p>
研 究 対 象	<p>包含基準：2023年7月から脳卒中の診断で当院脳神経外科に入院した患者。</p> <p>除外基準：くも膜下出血で入院した患者、入院前のmodified Rankin Scale5の患者。</p>
研 究 責 任 者	小田原市立病院 リハビリテーション室 小澤哲也
研 究 実 施 期 間	研究許可日~令和9年3月31日
連 絡 先	小田原市久野46番地 小田原市立病院 0465-34-3175